

## シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』

—「不思議な呼び声」と〈語り〉の手法—

久野幸子

## (一)

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の『ジェイン・エア』(Jane Eyre, 1847) には、さまざまな偶然の出来事が起こる。結婚式の最中にロチェスターに妻のいることが発覚する、放浪し、餓死寸前のジェインが行き着いた先が一度も会ったことのない従兄の家であった、その従兄の世話で村の学校の教師として自活し始めたとき、思いがけず叔父の莫大な遺産が贈与される、等々。しかし、小説というジャンルには、実は偶然の出来事はよく起こるものである。そして、『ジェイン・エア』も主人公の手記ではなく小説なのだから、余りにも多く起こりすぎてはいるものの、偶然の出来事が起こること自体は容認できると思う。

だが、ジェインとロチェスターとの間に起こった〈交感現象〉、つまり、*“mysterious summons”*、「不思議な呼び声」という超自然的出来事となると、やはり、問題となるのではないか。そのうえ、この作品に

は全篇に渡ってパニヤンの『天路歷程』(The Pilgrim's Progress, 1678, 84) へのアルージョンがあり、ジェインは常に自らの行動にキリスト教的意味づけを与えている<sup>(1)</sup>。そのジェインが、精神的危機に際して神に祈ったときに、〈交感現象〉が起こった。とすると、この超自然的出来事は、ジェインの切なる祈りに対して神の示したプロヴィデンス、摂理であったのだろうか。

もちろん、この問題を考えようとすると、ヴィクトリア朝初期という、さまざまな面で女性の行動が厳しい制約を受けていた時代に生きたジェインが、妻のいるロチェスターのもとへ帰るには、このような超自然的出来事がどうしても必要であった、という解説に出会う。成程、そういう必然性はあつたかもしれない。また、そのヴィクトリア朝初期には、スコットやカーライルの影響で、詩的、予言的、幻想的傾向をもった作品が多く書かれ、一方、神秘学や交霊術への関心も復活しつつあったという<sup>(3)</sup>。たとえば、ブロンテとはほぼ同時代を生きたフロレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910)

は、「自分の才能と欲求を生かす職業を必死で求めていたとき、われに仕えよ、という神の呼びかけを四度聞いた」という<sup>(4)</sup>。しかし、神のお告げとか超自然現象をそのまま小説に描くことにはそれなりの抵抗感もあつたようである。もう一人の同時代人のジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-1880) は、「交感」といつた超自然現象にかなり批判的であつたらしい<sup>(5)</sup>。つまり、当時の人々には、そのような出来事を信じる人もいれば信じない人もいた。ブロンテ自身もそう考えていたのだと思う<sup>(6)</sup>。そこで、ブロンテは、ジェインとロチェスターをいかにもそのような出来事を体験しそうな人間として描いている。作品中に二人がともに、ロマンティックで、予感、交感、前兆などを信じやすいタイプであることを示している箇所はいくつもある。そこで、読者はジェインとロチェスターならば、体験するだろうと納得できる。

このことを指摘する解説も実に多い。しかしながら、それらはそれらとして、いまは議論を先へとすすめたい。私が本稿でとくに考察したいのは、この小説中に超自然的出来事が起こるといふ事実ではなく、起こつたその出来事がどのように語られているのか、ということである。何故なら、この小説は、詳しくは、「自叙伝」といふ副題をもつ、三十歳のジェインがほぼ十歳の頃から二十歳の頃までの自分について一人称で語る「自叙伝体小説」<sup>(7)</sup>であり、つまり、全知の語り手でも、第三者でもなく、体験者であり、かつ、語り手であるジェインが、その出来事をどのように語っているのか、ということが、最も重要な点と考えられるからだ。問題はこの小説における「語り」の手法なのである。

## (11)

では、三十歳のジェインが二十歳の頃に体験した「交感現象」についてどのように語っているのかを具体的に検討してみよう。

まず、三五章の章末部、ジェインは、「結婚してインドへの伝道に同行してほしい」というセント・ジョンの求婚に承諾の返事を迫られていた。自分ではどうしても決められず、彼女は「とるべき道をお示しください」と神に祈る。すると、何マイルも離れたところに住んでいるロチェスターの彼女を呼ぶ声が聞こえる。それに対し、彼女は「迷信よ、行つておしまい」と次のように自分の心に言い聞かせる。

'This is not thy deception, nor thy witchcraft: it is the work of nature. She was roused, and did — no miracle — but her best.' (445)

今の呼び声は、迷信というお前の瞞着でもなければ、お前の妖術でもない。あれは「自然」のみわざだ。「自然」は呼び起こされて、彼女の最上の策をほどこしたのだ——奇跡ではない。(三四〇)

引用中の「自然」とは、「本性」といふような意味であろう。この場面には、しばしば指摘されるジェインの二面性——興奮しやすく想像力に富む一面と落ち着いて、自分の行動を冷静に分析できるもう一面がよくあらわれている。

そして三七章には次のような場面がある。二人が再会した翌日、ジェインはロチェスターの話を聞き、丁度同じ時刻にロチェスターもジェインに向かって呼びかけ、それに答えるジェインの声を聞いた、と知る場面である。ジェインだけが聞いた、あるいは聞いた、と感じた三五章の場面では、ジェイン、ジェインと呼ぶ声が彼女自身、自分のうち側から聞こえたと言っており、読者もその説明を受け入れることができる。また、ロチェスターにしても、本当にジェインの声を聞いた、あるいは聞いたと感じたのかもしれない。しかし、この場面に明記されているように、ジェインの声をロチェスターが、ロチェスターの声をジェインが同時に聞いていたということになると、これはやはり、それぞれの肉体から一時的に解放された魂と魂との対話であり、明らかに超自然的出来事である。そして、まさにそのとき、ジェインもロチェスターも必死で神に祈っていたのだから、ここで、作者ブロンテはそれを、体験者ジェインがその気になれば、『神の摂理』の啓示として受けとることができる出来事として、語り手ジェインに語らせていると思われる。しかし、このときの体験者ジェインは、彼女のほうからは自分も体験していた（交感現象）についてロチェスターには何も告げていないのである。

I listened to Mr Rochester's narrative, but made no disclosure in return. The coincidence struck me as too awful and inexplicable to be communicated or discussed. If I told anything, my tale would be

such as must necessarily make a profound impression on the mind of my hearer: and that mind, yet from its sufferings too prone to gloom, needed not the deeper shade of the supernatural. I kept these things then, and pondered them in my heart. (472)

私はロチェスターの話すのに耳を傾けているだけで、私のほうからは何も打ち明けなかった。この符号は、人に話し、また論じ合うには、あまりに畏ろしく、説明しがたいものである。私が、もし少しでも話したなら、この話は、私の聞き手に、かならずや深いショックを与えたにちがいない。そしてまた、彼の受けている悩みのために、ともすれば沈みがちな心に、この不思議な出来事を知らせて、さらに深い陰影を投げる必要はなかった。それ故、私はこれを私の胸に秘めて、心の中で考えるだけにとどめておいた。(三九三)

ロチェスターは、このあと、確かに神に感謝の祈りを捧げているが、それは、ジェインが自分のもとに本当に帰ってくれたことに対してであり、神意が『交感現象』の同時発生として示されたことに対してではないのである。

そして、その後、「読者よ、私は彼と結婚した」というよく知られた台詞で始まる三八章でも、ジェインは二人の幸せな結婚生活を語るが、二人が『交感現象』について話し合ったという記述は一切ない。ジェインによれば、「一日中話しあっている」はずの二人が、である。

語っている三十歳のジェインは、十年後のいまも、ロチェスターにその体験を隠し続けているのだろうか。結婚生活に満足し、自分の選択の正しさを確信していれば、おのずから啓示の体験を夫と語り合ったはずではなかったのか。

要するに、語り手のジェインは体験者ジェインに起こった出来事については書き、そして、それに従って行動しながら、夫にも読者にもはっきりとした説明はしていない。それどころか、実は、語り手ジェインは、これらの出来事を話す前に、正確には三五章で、彼女が「不思議な呼び声」を聞いたときのことを話す前であるが、

I was excited more than I had ever been; and whether what followed was the effect of excitement the reader shall judge. (444)

私は、かつて経験したことがないほど興奮していた。だからそのあとの出来事が、私の興奮の結果かどうかは、読者の判断におまかせしよう。(三三八)

と言っているのである。

### (三)

では、これまで、批評家たちがこの点をどのように論じてきたのか、ごく簡単に見ておきたい。

断言はできないが、ほぼ一九七〇年代までは、多くの批評家が無視するか、たとえば、「あとで、ジェインから〈交感〉の事実を告げられて、ロチェスターはジェインと二人で神に感謝の祈りを捧げた」というように、誤読していたと思う。また、この〈交感現象〉について、この小説には、そもそも、ジェイン一人の主観の世界が描かれているのだから、その彼女の世界でリアルなら、それで問題はないのではなにか、という反論もある<sup>(8)</sup>。だが、これはおかしいと思う。何故なら、この〈交感現象〉はロチェスターにも起こっていたのであり、二人に同時に起こっていたという極めて重大な事実はたとえ、ジェイン一人の主観の世界でも、無視できるようなものではない。そして、語り手としての彼女は一部のごく限られた読者ではなく、多くの読者に自分の物語をリアルなものとして納得してもらわなければならないからである。

もっとも、ジェインの信仰獲得、ロチェスターの信仰獲得の描き方が不十分であるという指摘は、実は、作品発表当初からあった。当時、『ジェイン・エア』の結末に不満で、ジェインに相当する主人公がロチェスターに相当する求婚者をしりぞけ、セント・ジョンに相当する人物と伝道に向かうという内容の作品を出版した小説家さえたとい<sup>(9)</sup>う。

このことを、二十世紀の批評家のなかでもっとも、はっきりと理論的に主張したのが、バーバラ・ハーディ (1964) である。ハーディはリチャードソンの『パミラ』(Pamela, 1740) やデフォーの『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe, 1719) のような十八世紀の

小説と同様、この作品も神の摂理を小説の骨組みとしてしていると捉え、それなのにここにはジェインの不信仰から信仰獲得への過程が十分描かれていないと指摘した。

We have not seen the process of her religious education and faith, and the divine law which she invokes in the crisis has not been associated with either her feelings or her reason. <sup>(12)</sup>

私たちには彼女の宗教教育や信仰までの過程を知らされないし、危機に際して彼女が訴える神のおきては彼女の感情や理性から連想されるものでもない。

そして、小説全体について、次のように言っている。

The framework of the novel is consistently Providential, but within the frame there are omissions and simplifications. <sup>(11)</sup>

小説の骨組みは、一貫して神の摂理に依存しているのに、その骨組みのなかで、省略部分や簡略部分がある。

ハーディは、明言してはいないが、ここでいう省略・簡略部分のひとつとしてジェインとロチェスターの神の摂理についての話し合いや信仰の確認、神への感謝の祈りなどを考えていると思われる。

ところで、一九八〇年代に入り、語り手ジェインに対して、多くの批評家がいろいろな疑問を表明するようになった。なかでとくに、ペーター・アラン・デール(1986)は彼女が打ち明けなかったことを「全く不合理なこと」と断定している。

The explanation for not revealing the coincidence to Rochester is, as Brontë must have recognized, a tremendous *non sequitur*. The suffering mind, "prone to gloom" — not only Rochester's but her own — wants precisely the reassurance of supernatural and benevolent intervention that she withholds. <sup>(13)</sup>

ロチェスターに(〈交感現象〉の)同時発生を打ち明けないのは、ブロンテも気がついているに違いないのだが、とんでもなく「不合理なこと」である。ロチェスターばかりでなく、彼女自身の「沈みがちな」苦しんでいる心は、まさに彼女が胸に秘めてしまった超自然の慈愛に満ちた介入を確信したがっている。

デールは、三七章で打ち明けなかったジェインは、最終章でも、  
I live with God in my heart and daily praise him for the good he has done me. <sup>(13)</sup>

私は心の中で神とともにあり、日々、神のなされた善ゆえに神を

賛美する。

というような神への感謝の言葉を口にしていない、と指摘し、結局、作者ブロンテはジェインの信仰獲得が達成されていないことを仄めかしていると推論する。そして、デールは、この作品には宗教的構造とロマン的構造の二つがあり、ブロンテは男女の愛と信仰とが両立しえるかどうか、という問題についてははっきり答えを出していないと締め括っている。

私はデールの主張に、ほぼ、賛成である。だが、〈交感現象〉の同時発生を「あまりに畏ろしく、説明しがたいもの」と語った二十歳のジェインの言葉は、彼女がそれを〈神の摂理〉の啓示であるにとらえたことを暗示していると思う。この場面での彼女は、そこまで精神的に高まり、人間的に成長していたのである。二十歳のジェインがそのときロチェスターに告げないのは、とっさのことでしたっきりした判断ができないと感じ、説明を避けたのだと考えられる。<sup>14</sup>しかし、三十歳のジェインがそのときもその後も、そのことについて、全く語っていないのは、極めて不自然だと思う。それ以前の出来事については、あれこれ三十歳の自分が感じる気持ちを言い添えていた彼女が、ここでは「読者に判断をおまかせしよう」としか言っていないのである。やはり、語り手ジェインの心のなかで、何かが起こっているに違いない。とすると、結局、考察しなければならぬのは、体験者ジェインの、ではなく、語り手ジェインの心理であり、そして、彼女と彼女を巧みに操っている作者ブロンテとの関係である。そこで、いまから、この

小説における「自叙伝体」という〈語り〉の手法について、更に詳しく検討してみたい。

#### (四)

ブロンテは、自叙伝というかたちで、ジェイン自身にその体験を語らせた。この一人称による〈語り〉は、読者の心に主人公ジェインへの共感や一体感を抱かせるもつとも効果的な表現方法である。そこで、小説の冒頭から、読者は自分自身が、不幸な境遇に生まれながらもけなげに苦境に耐え続けるジェインその人であるかのように、一喜一憂しながらこの小説を読みすすむので、結末に描かれるジェインの最愛のロチェスターとの結婚生活に心から満足させられてしまう。

ところが、「自叙伝体」というこの小説の〈語り〉の手法には、手法そのものに大きな危険性が潜在していた。ロバート・ブラウニングの〈劇的独白〉(dramatic monologue)と同様、〈語り〉そのものが、語り手自身は気づいていない語り手本人の心理の奥底まで逆に暴露してしまうのだ。それ故、伝記には伝記作家の対象に対する「お追従」や「お世辞」という危険が潜むように、自叙伝にも、どうしても語り手自身が「自己肯定」、「自己満足」、「自己賛美」、「自己陶醉」などに陥り易いという危険性がある。

ところで、英文学史上、十九世紀は十八世紀について、伝記や自叙伝への関心が高まった時代であった。<sup>15</sup>ブロンテも書簡集などから判断すると、伝記や自叙伝をよく読み、大いに関心をもっていたらしい。そこで、この危険性についてブロンテ自身が、どのように考えていた

のか、書簡集から彼女の意見を拾ってみよう。

一八四八年六月、の スミス氏からフランスの革命政治家ミラボーの伝記を受け取ったブロンテは、一週間後、読後感を Mrs. ウィリアムズ氏に書き送っている。そのなかで、ブロンテは、『ミラボー伝』の作者がミラボーの過ちを正確に描いていないことに苛立ちを覚えたことを告げ、

*It appears to me that the biographer errs also in being too solicitous to present his hero always in a striking point of view — too negligent of exact truth. He eulogizes too much.*<sup>(16)</sup>

私には伝記作者は対象とする人物を常にひとつのはっきりした視点から描きたいという誘惑にかられ——正しい真実を見落とすので、描きそこなうように思えます。彼は余りに誉めすぎます。

と言っている。伝記作者が対象を誉めすぎると真実を損なうというのだ。この伝記作者への苦言は当然、自伝作者にも通用するものである。自伝作者はどうしても自分を誉めてしまいがちなのだ。

とすると、作者ブロンテはこの小説を「自叙伝体」という〈語り〉の手法を用いて執筆するにあたって、どのような点を配慮したのだろうか。そして、それらの配慮は、いま問題としている〈交感現象〉についての〈語り〉にどのように反映されているのだろうか。

まず、第一に、ブロンテが主人公ジェインを、外面的には小柄で不器量な、しかし、内面的には誇り高く誠実な人柄に設定していることに注目したい。作者ブロンテはさまざまな機会をとらえ、極めて巧妙ようにしている。この点についてはあまりに度々指摘されているので、ここでは詳述しない。だが、注意しなければならないのは、ジェインがどれほど、正直で誠実だろうと、結局は、語り手ジェイン自身自分の正直さや誠実さを印象づけるエピソードを選んでいくということである。

そこで、第二に検討したいのは、ジェインの〈語り〉の信憑性についてである。十一章冒頭での、これは「普通の自叙伝ではない」(not a regular autobiography) という語り手ジェインの言葉は、勿論、「精神的自叙伝」を書こうとしていると解釈するのが、もっとも妥当であろう。しかし、恣意的な自叙伝ともとれる。では、恣意的自叙伝とはどのようなものか。語り手が語りたいと思うことしか、語らないということだろう。語り手のジェインは物語の途中で、しばしばどいほど「自分が記憶しているのは」とか、「自分の記憶に残ったのは」と自らの〈語り〉の恣意性を強調している。記憶というものは、元来、いい加減なものである。つまり、語り手ジェインは、体験しているジェインその人ではなく、無色透明、完全無欠の人間でもなく、個性をもち、多分、偏見にも毒された存在なのである。

となれば、三十歳のジェインは超自然的出来事を、二十歳のジェインの体験としてなら、語る事ができたが、その意味づけを拒んでい

ると考えることもできるのではないか。では、何故、拒むのであろうか。語り手ジェインには、現在の生活が本当に神意に添ったものかどうか、確信がもてないからではないかと思われる。三十歳のジェインの現在の理性と道徳観がかつての体験を〈神の摂理〉の啓示として認めることを拒んでいる、と言えるかもしれない。勿論、語り手のジェイン自身が、そのことをどこまで自覚していたかは不明である。しかし、とにかく、彼女自身の心のなかに、わずかだが何か落ち着かないものがあつた。作者ブロンテは、それを表現するために、語り手ジェインに説明を拒ませ、いや、曖昧な説明をさせたと思われる。

三番目に検討したいのは、結婚から現在までを語る三八章である。この章は、当時の小説での定石通り、なにげなく書き加えられた後日談のようであるが、実は、意味深長な部分である。最初の部分に、二人の結婚生活がどれほど完璧なものであるのかについて、ジェインの説明がある。しかしながら、一九八〇年代になって、先に語り手ジェインにたいする疑問については触れたが、この『ジェイン・エア』の結末に対しても、いろいろな矛盾や不合理があるという指摘が聞かれるようになった。たとえば、失明し、片腕を失ったロチェスターにとつて、ジェインの献身的愛情にのみ依存する結婚生活が本当に幸せなものであつたのか、という疑問、二人が生活するファーンデーンはロチェスターがパーサを住まわせることもできないと考えていたほど不健康な土地であること、ジェインのアデルへの配慮が足りないこと、結婚後の二人とつき合う人の数が極端に少ないこと、十二章の冒頭であれほど激しい口調で広い世界に活動の場を持つことを願つたジェイン

ンが、このように社会から隔絶したファーンデーンでの生活に満足できるはずがないこと、そして、何故、ジェインが彼女の物語の最後に、現在の自分の心境ではなく、セント・ジョンからの手紙と祈りの言葉、近々届けられるであろう彼の殉教についての報せをおいたのか、という疑問、等々。これらさまざまな疑問点は、〈交感現象〉についての曖昧な説明とともに、この小説には「自叙伝体」という（語り）の手法が用いられていることを考えれば、かなり納得できるのではないだろうか。つまり、それらの矛盾や不合理は、ジェインの結婚生活に対する説明が「ひとりよがりの自己満足的なもの」であることを暗示し、彼女自身の抱く不安感を匂わせているからである。勿論、これにも「必然性説」を持ち出して、ブロンテとしては当時のように因習的な社会環境では、二人にはあのようなファーンデーンでの結婚生活しか与えられないのだ、という弁明をする批評家もいる。その通りだと思ふ。しかし、ここで私が強調したいのは、ブロンテがジェインの余りに自己肯定的な（語り）に不安感を潜ませることで、逆説的に閉塞状況におかれていた当時の女性の現実を暗示しているという点である。

要するに、作者ブロンテは、この小説でも主人公の選択を最良、唯一の道と考えているのではないと思う。ブロンテは作品を書く場合、ひとつの結論のみを提示しようとは考えていなかったらしい。彼女自身にも結論が出せなかったのかもしれない。このことは、彼女の書いたほか三冊の小説の結末からも容易に類推できよう。従来の批評は、ジェインの愛の哲学をブロンテのそれ、ジェインの生き方をブロンテ



自身の理想ととらえがちであったが、語っているのはあくまで語り手主人公のジェインであり、ブロンテではない。ブロンテは体験者でも語り手でもあるジェインの生き方をまるごと提示し、すべての判断を読者に委ねているのである。

更に最近はこの作品について、とくにバーサ・メースンの扱い、ジェインの持つ隠し切れない階層意識、ブロンテが伝道というかたちでの帝国主義的行動を肯定していることなどについて、第三世界や労働者階層の側に立つ批評家からの鋭く厳しい指摘も多くなった。しかし、主人公が一個の人間としてリアルに描かれていなければならないほど、当然、いろいろな偏見や偏向性を持っているに違いない。フランス人を貶すジェインの盲目的愛国主義は、ブロンテのものであったかもしれないし、そうでなかったかもしれない。しかし、たとえ、そうであったとしても、「自叙伝体」小説ならば、ジェインのものであったと弁明することができるのではないか。作家もまた、それぞれの時代を懸命に生きているのである。ブロンテはこの作品を「自叙伝体」小説にすることで、芸術によって「自我」を時代の制約や束縛から守っている、とも言えよう。この意味からも、この「自叙伝体」という〈語り〉の手法は、作家ブロンテにとって極めて有効な表現方法であったと思われる。

## (五)

確かに「ジェイン・エア」は出版された小説としては、ブロンテの最初の作品であり、小説としては『教授』について、執筆第二作目で

あった。しかし、ブロンテは、綿密に構想を練り、多くの工夫を懲らし、さまざまな技巧を駆使して、この小説を書き上げている。「ジェイン・エア」執筆当時の彼女は決して未熟な作家ではなかった。彼女にはそれ以前に十数年という長い作家修業の時期があったのであり、妹たち二人の存在も批評も決して無視できなかった。ブロンテは当然、二人の小説から多くを学んだと思うが、二人の試みとは別の工夫や仕掛けを盛り込むことも願っていたに違いない。そして、そのひとつが、「自叙伝体」という〈語り〉の手法に潜む危険性を逆に活用して、より一層人生の真実に迫る作品を執筆することであった。

そこで、ブロンテがこの「不思議な呼び声」について、語り手ジェインにこのような曖昧なかたちで語らせたのは、この作品を〈開かれた終わり〉で閉じようとする布石のひとつであったと思う。勿論、この「ジェイン・エア」という小説の魅力の大半は、主人公ジェインの真実の愛を求め続けるひたむきで、かつ情熱的な生き方にある。しかしながら、その愛を成就してしまったあとに一体何が残るのか。そもそも、三十歳のジェインと二十歳のジェインが全く同じ心境にいるわけがないではないか。二十歳の彼女に確かに啓示の瞬間があったとしても、語り手のジェインは日々、自らの生きる道を問い続けなくてはならない。ブロンテの厳しい求道の姿勢が結末部分に見え隠れしているのだ。<sup>(18)</sup>その意味で、これまで長い間、この小説が男女の間の対等な愛の成就と理想的な結婚を高らかに歌い上げるロマンティックな恋物語としてだけ読まれることが多かったのは、作者のより深遠な意図をかなり見落としたものであったにちがいない。

(注)

テキストは Q. D. Leaves ed., *Charlotte Brontë, Jane Eyre* (Penguin Books, 1966) を使用。原文はこの版から、訳文は遠藤寿子訳『ジェイン・エア』(岩波文庫、一九五七年) から引用し、それぞれ引用の終わりに丸括弧で引用頁を示した。

- (1) 拙稿『ジェイン・エア』における「天路歷程」へのアルーシオン」(愛知淑徳短期大学紀要) 第三十号、一九九一年) 参照。
  - (2) Kathleen Tillotson, *Novels of the Eighteen Forties* (Oxford, at the Clarendon Press, 1954) pp. 258-59.
  - (3) Diana Basham, *The Trial of Women: Feminism and the Occult Sciences in Victorian Literature and Society* (Macmillan, 1992) p. 2, p. 8.
  - (4) キャロリン・ハイルブラン著、大杜淑子訳『女の書く自伝』(みすず書房、一九九二年) 二二—二三頁。
  - Basham, pp. 57-8. Elaine Showalter, "Florence Nightingale's Feminist Complaint: Women, Religion, and Suggestions for Thought" (*Signs*, 6, 1981), pp. 397-98.
  - (5) Sandra Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (Yale Univ. Press, 1979) p. 444
  - (6) エリザベス・キャスケル著、和知誠之助訳『シャーロット・ブロンテの生涯』山口書店(一九八〇年) に次のような箇所がある。
- ある時彼女と話していた誰かが、私の前で、『ジェイン・エア』の中の、ジェインが人生の大きな危機に際して、その時何マイルも離れているロチェスターの聲が彼女に呼びかけるのを聞く箇所に抗議した。ミス・ブロンテがどの事件を思い出していたのかは分からないが、その時彼女は、息をひそめて低い声で、「しかし、それは本当のことです。本当に起こったのです」と答えた。(四六四—六五頁)

10

牧師補アーサー・ニコルスとの結婚を決意したブロンテはエレン・ナッシーへの書簡(1854. 4. 11) で、Providence offers me this destinyと書き、ウーラー女史への書簡(1854. 4. 12) には、

The destiny which Providence in His goodness and wisdom seems to offer me will not—I am aware—be generally regarded as brilliant.

と書いている。そこで、ブロンテ自身はプロヴィデンスを信じるタイプの人間だったとも考えられるが、書簡の相手に応じて、ヘルソナを変えたというブロンテなので、エレンやウーラー女史に対しては、プロヴィデンスを持ち出したのかもしれない。

(7) 「自叙伝体小説」というのは、主人公の自叙伝という構造で書かれた小説のことであり、autobiographicあるいはautobiographical novelの意味である。ブロンテの小説は確かに主観的で、彼女自身の体験や感情をもとに書かれているが、彼女の体験を小説の形で書いた、ということではない。この点について、アネット・トロムリーが次のように解説している。

For the novels are not Brontë's autobiography cast in fictional form; they are fictions cast in what Brontë called "the autobiographic form." (Annette Tromly, *The Cover of the Mask: The Autobiographers in Charlotte Brontë's Fiction*, Univ. of Virginia, 1982, p. 14.)

- (8) Ruth Bernard Yeazel, "More True than Real: Mysterious Summons" *Nineteenth Century Fiction*, 29 (1974) pp. 127-43.
- (9) Peter Allan Dale, "Charlotte Brontë's "Tale half"-told", *The Disruption*

of Narrative Structure in *Jane Eyre*. *Modern Language Quarterly*, 47 (1986) p. 121.

- (10) Barbara Hardy, "Providence Invoked: Dogmatic Form in *Jane Eyre* and *Robinson Crusoe*" (1964) in *Charlotte Brontë's Jane Eyre*, edited by Harold Bloom (Chelsea House Publishers, 1987) p. 27. ノービーは前米の予感も偶然の一致も交感もすべて神の摂理の顕現と考えている。つまり「交感現象」のみを特別視している点がある。

(11) Hardy, p. 28.

(12) Dale, p. 120.

(13) Dale, p. 120.

- (14) キャロル・ホック(一九九二)は「物語を話す人」(storyteller)と云う「何故『ジェイン』がロクステスターに打ち明けなかつたのかについて、興味深い話論を展開している。

Jane's success in these final scene is... triumphant almost with a vengeance.....  
 But like most of the other characters in this novel, Jane seems more than willing to sacrifice truth in order to maintain power in the story-telling situation. She withholds, for example, the story that she might tell Rochester to corroborate his own account of their telepathic communication.....  
 (Carol Bock, *Charlotte Brontë and Storyteller's Audience*, Univ. of Iowa Press, 1992, pp. 100-101.)

(これらの最終場面におけるジェインの成功は「……殆ど復讐していると思われるくらい勝ち誇ったものである。……しかし、この小説の他の大抵の人物のように、ジェインは物語を語

るという状況で力を維持するため、喜んで真実を犠牲にするところではないように見える。たとえば、彼女は、ロクステスターに話せば彼のテレパシー的交感の話に確証を与えそうな話を胸に秘めてしまっている。)

- (15) Keith Rinehart, "The Victorian Approach to Autobiography" *Modern Philology*, 51 (1954), pp. 177-86.

(16) *The Brontës, Their Lives, Friendship and Correspondence* (First edition, 1933, Oxford, reprinted in two volumes, 1980 by Porcupine Press INC, 1980) Vol.II, p. 225.

以下、書簡集からの引用はこの版からとし、引用の終わりに丸括弧で引用箇所の巻数及び頁を示した。

- (17) (一) トロムリーは「この点を次のように説明している。

Jane's hyperbolic description of her happiness betrays the same complacency that she has confronted in other people so often... But by means of her inflationary rhetoric, she inadvertently undercuts her own fictive Eden. (p.59)

(ジェインの自らの幸福を描く誇張した叙述は、彼女が他の人に度々見つけたのと同じ自己満足を抱いていることを暴露している……彼女は過剰な修辞表現によって、彼女自身の描く架空のエデンをすっかり自分から切り崩している。)

(2) (二)で「もう一つ、この主張を支えるものとして、この作品の出版に関する次の事実を指摘したい。

第一版の『ジェイン・エア』(一八四七年十月出版)は、正確にはカラー・ベル編集『ジェイン・エア自叙伝』であった。この設定が具体的に何を意図したのか、少々理解しにくい。日記や書簡の編集なら理

解できるが、自叙伝に編集者がどのように介入するというのだろうか。但し、カラー・ベルを編集者にしたことで、ジェイン・エアという実在の人物の手記であるという（現実らしき）は強調できたと言える。

ところが、第二版（一八四七年十二月出版）では、ブロンテはスミス社のウィリアムズ氏の忠告に従って、カラー・ベルを編集者から、作者に変え、序文のあたりでサッカレーへの献辞をつけた。まず、編集者から作者に変えたことで、小説であることがはっきりした。次に、序文には、前半で第一版に対して寄せられた非難や批判に、「作者が攻撃しているのは、道徳ではなく因習であり、宗教ではなく宗教的偽善である」というような弁明が書かれ、後半に、サッカレーを「世間に迎合するのではなく、あえて現実を暴露する作家」として称える言葉が書かれている。そして、これからが私の勝手な推論なのだが、ブロンテはこのような序文をつけることで、ジェインの結婚生活を語る口調にジェイン自身気づいていない度のすぎた自画自賛の危険性をも書き込んであることも読者に読み取ってもらいたかったのではないかなぜなら、序文からの次の引用にも見られるように、

... narrow human doctrines, that only tend to elate and magnify a few, should not be substituted for the world-redeeming creed of Christ. (p. 35)

所詮、ジェインもまた、あやまりを犯しがちな人間のひとりにすぎないからである。

(18) このように推論する根拠のひとつとして、ここで、ブロンテが一八四八年七月に W.S ウィリアムズ氏に送った書簡からの次の一節を引用したい。

I perceive myself that some high falls on earth from Heaven—that some rays from the shrine of truth pierce the darkness of this life and world; but they are few, faint, and scattered, and who without presumption can assert that he has found the only true path upwards?

(II, 242)

（私自身、ある光が天上から地上を照らしているのを感じていますが、その暗い人生と世の中を突き抜ける真実の宮からの光線。しかし、それらはわずかで、かすかで、分散してしまうので、誰が一体、思い上りなしにその天上への唯一の道を見つけたと断言できるでしょうか。）

つまり、ブロンテは、体験者のジェインが神の啓示を感知したとしても、それは一時的なものでしかなかったと考えていたと思われる。